



極楽通信

Vol. 11

UBUD

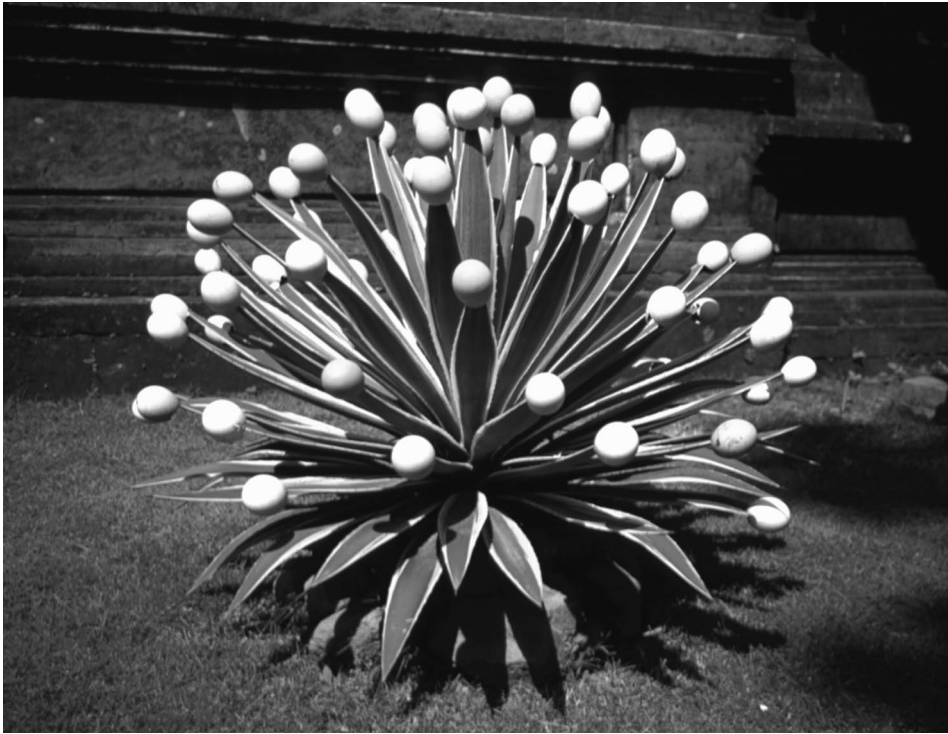


photo: Y. Hori

バリを歩いていると、よく変なものに出会う。変なものとは「何これ?何のためにあるの?」といった類である。中にはちゃんと意味があったり、思いもかけない機能が隠されていたりするものもある。しかし、そうでないものもたくさんあるのである。かっこよく解釈すればアートともいえるオブジェに見えることもある。

石に彫られた様々な像などはあらゆるところにあるが、これはまだわかる。バリでは1年もほったらかしておく、苔むしてまるで紀元前からある遺物のような貫禄も醸し出される。形もおもしろいものがたくさんある。しかし、そういったものとも違う訳のわからない形態のものに出会った時は、暫し足を止めて眺め入ってしまったりもする。「?」という感覚で乏しい想像力を働かせてそのものを理解しようとするが、「?」という結論しか出てこない。でもって、「ま、いっか」と納得して「へへへ」とニタ笑いしながら立ち去るのであるが、こういったものに限りその後も頭から離れなくなるほど脳裏に焼き付いているのである。

バリには哲学があちこちに落ちているのかもしれない。へへへ。

堀 祐一

ꦏꦶꦫꦏꦶꦫ

Vol. 11 1995 Kira-kira

Contents

● Kabar Baru Berita Lama	
インドネシア独立記念日 50 周年 -----	4
Dirgahayu INDONESIA! -----	5
サーカス (CIRCUS) -----	6
バリ・コレラ騒動 -----	8
● Profil / 人物紹介	
GUSTI AYU SRI YULIATHI -----	9
● BUKU-BUKU 紹介	
帰らなかった日本兵 -----	10
● C・O・L・U・M・N	
バリ人の四人に一人がワヤンさん -----	11
物売り撃退法 -----	12
● P ちゃんのクタでクタクタく 3 >	
P ちゃんのホリデーの過ごし方 -----	13
● Mandi Sore	
夕方マンディのすすめ -----	14
● Leporan Koresponden Khusus	
マッサージ -----	15
● UBUD よろず百科	
MASSAGE -----	16
● BINTANG/3	
ビンタン涅槃楽 [3] -----	18
● Belajar Tari&Gamelan -9-	
私と舞踏 -----	23
● Toko BEST 店	
Salza -----	24
● Warung 味な店	
Apa Kabar? -----	24
● Pondok Manis 私の常宿	
Tegal Sari Accommodation -----	25
● Pesan & Kesan 旅人一声 -----	25
● Dari Jepang	
ワヤンさんいらっしゃい -----	26
● その他のニュース -----	27
● ウブッな人々 -----	29
● 楽器の名前 -----	30
● Pengumuman 伝言板 -----	30

○表紙のことば○

イラストは（というよりも写真とイラストの合成ですが）チョンドン役の YULIATHI と、レゴンの冠についているジュブンの花です。私は、ジュブンの花には少女の持つ清らかさみたいなものをイメージします。華やかなレゴンドダンスですが、動の中にそんな静の部分も感じます。

小島基典

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

Macintosh フォーマットの FD (Text Data)

Dos フォーマット (2DD-720KB) の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202 : 菅原 (NiftyServe)

GCB01162 : 堀 (NiftyServe)

potomak@st.rim.or.jp (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

INDONESIA MERDEKA 50TAHUN
インドネシア独立記念日 50 周年

日本が太平洋戦争に敗戦した二日後、1945年8月17日：午前10時、ジャカルタのスカルノ私邸前。紅白のインドネシア国旗の前にスカルノの姿が現われた。数千人の群衆は興奮の坩堝でスカルノの名を叫ぶ。この時の歓声はさぞさまざまのものであったろうと想像ができる。群衆の前にスカルノが進み出ると、スカルノのこれから発する言葉を一言洩らさず聞こうと、群衆は期待に胸を膨らませ、そして目を輝かせた。スカルノは静まりかえった群衆に向かってゆっくりと、そして力強くインドネシア共和国独立の宣言を読み上げた。

宣言

われわれインドネシア民族は、ここにインドネシアの独立を宣言する。
権力の委譲等に関する諸事項は、細心かつできるだけ速やかに実施されるものとする。

1945年8月17日

インドネシア民族の名において…
スカルノ ハッタ

(この独立宣言文は、ジャカルタの独立記念塔 = Monas に展示してある)

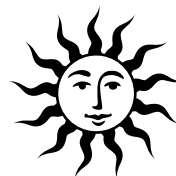
この独立宣言のあと真の独立を勝ち取る戦争は4年間も続き、完全独立を成し遂げたのは1950年8月であった。そして今年に独立記念日50周年にあたる。そんな歴史をわれわれ観光客はこれぼっちも知らずに、平和な島バリエを満喫している。

独立記念日50周年の首都ジャカルタは、色とりどりのイルミネーションでデコレーションされ、近代都市の輝きを放ち活気が感じられ、そして各地で開催された記念式典やイベントも例年以上の賑わいを見せていたという。

UBUDでは、宗教儀礼で使われると信じていたペンジョールが家々の門に立てられ、道路のあちこちには紅白のビニール製の旗が取り付けられ、なかには電飾が付いている家もある。独立記念の大小の

看板が自主的なのか強制的なのか、各バンジャールや店々、そして家々にも掲げられ、独立の喜びをアピールしているかのようであった。

看板はさすがに絵画の村UBUDらしく、ユニークですばらしいものがたくさんあり目を楽しませてくれた。記念式典はサッカー場でUBUDの各バンジャールによるパレガングジュールと舞踊の共演が行なわれた。観光客としては、記念すべき50周年はもっと派手で熱狂的かと思っていたが、いたって質素でちょっぴりガッカリであった。こんな考えは少し不謹慎かな？



Dirgahayu INDONESIA!

UBUD 在住 : Y.S

毎年、夏の観光シーズンに入る頃になると、あちこちで、小学生から高校生までの行進の練習を見かけるようになる。そして「ああ今年ももうそんな時期か…」と思う。各地方で催される独立記念式典のイベント、行進コンテストの練習である。真昼間、炎天下のアスファルトをえんえんと歩かされている子供達を見ると、かわいそうで仕方ないが、これも一年に一度のビッグ・イベントのためなのだから、しょうがない。

毎年 Ubud でも、サッカー・グラウンドで式典と何かしらのイベントが行なわれるが、今年のはすごかった。

各バンジャール、そして近隣の村々からの代表チームによる“芸の祭典”それに続いて同じく ibu-ibu 代表チームによるエアロビクスの競演があり、あのだっ広いサッカー・グラウンドが人で埋まるほどの参加人数だった。

その“芸の祭典”なるものがすばらしかった。

プリ・サレンのトゥドン・アゲン（少年・少女のガムラン & 舞踊教室）からは数十人にも及ぶクンダン（太鼓）の集団行列、それぞれのバンジャールからは新作の踊り、女性だけのバレ・ガンジュール、シラット（武道術）のデモンストレーション、などまさに目白押し。観る側としては、これが独立 50 周年の式典だということも忘れてはしゃいでいたわけだが、それらしい式辞が始まってようやく「インドネシア」を意識したのは私だけではあるまい。

興味深かったのは 50 周年を祝う看板である。各店先やレストラン、ホテルなどは入口に、道から見えるようにそれぞれ手づくりの看板が飾られたのだが、この看板に描かれたイラスト（絵？）によって、彼らの独立に対する感情やイメージが浮き彫りになっていた。というのは、多くの、いや、ほとんどの看板に“戦い”のイラストが描かれているのだ。それも、

血まみれの独立軍の兵士がすさまじい形相で銃を手にしているような絵である。

たとえば日本人が思い思いに終戦記念の看板をつくり、絵を描いて飾るとしたら、どんな絵を描くだろう。おそらく、平和をイメージした、おだやかなものを描くに違いない。原爆で焼けただれた人々やカミカゼ特攻隊のゼロ戦を描く人はまずいないだろう。

ではなぜインドネシアでは“戦い”のシーンが描かれるのか。それは彼らが“戦い”によって独立を勝ちとったからだ。

昔から一方的に他国を侵略し、最後には原子爆弾によって一瞬のうちにうちのめされてしまった我々日本人が、戦争に関してきれいごとを並べるのとはわけがちがうのである。戦ったことが恥となり、悪となり、罪となった日本と、戦ったことで自由を勝ちとり、独立国としてはじめて産声をあげたインドネシア。

今やっと 50 年。日本人のひとりとして、この国のすこやかな成長を願ってやまない。



サーカス (CIRCUS)

サヌールに大きなテントの館が出現した。あたりには夜空にキラキラとネオンが輝き、おとぎの国の遊園地を思わせる。魅せられたようにテントに近づくと、そこにはラクダがいるではありませんか。そうです砂漠の国に棲むラクダです。バリにラクダがいたという話は聞かない。「ここはどこ？エジプトかしら？」なんて思わずおね一言言葉になってしまう。そういえば数日前、クタの道をラクダが歩いているのを見かけた。これはきっと日本人の商売人が「月の砂漠をクタで」とラクダの背に観光客を乗せるニュー・ビジネスでも考えのだろうとその時思った。そうかここがその本拠地だったのか。

少しがっかりした気分であたりを見渡すと、なんとこんどはゾウが五頭もいるではありませんか。ムゥーまさか「インドの王様気分をクタで」なんて珍商売を日本人が考えたんじゃないかな、そんなことはわしは許さないゾー!!と少し興奮気味。ゴア・

ガジャ(象の洞穴)やクルンクンの街に入る橋に大きな象のモニュメントはあるがバリにゾウがいたという話も聞いたことがない。ガネーシャの像はあるがそれも宗教上の話でゾウがいたというわけではない。ところでここはいったい何なのだ？

頭を抱え目の前にある檻の中を覗くと、なんとそこには、ハリマオ(虎)が寝そべっているではありませんか。それも縫いぐるみではなく、縫いぐるみのような本物のホワイト・タイガーである。これはバリ人が見たら驚くことだろう、もっとも日本人の私でさえ驚いた。ここは動物園なのだろうか。

スガラの動物園があまりにもおそまつなので、バリ州が名誉挽回でどこからか本格的動物園でも呼んだのだろうか。……近くにカラフルな車が止まっている、その横には小人が立っている。南の島バリに何が出現したというのだ？そして、目の前の大きな看板を見てやっと気が付いた私であった。



▲そーとーアヤシゲである。



それでは、ここで連想ゲームです。キグレ、木下と言えは？ そうですわたしの友人の名前です、そんなわけはありません。それではヒントです、ソ連のボリショイと言えは？ これでもわからない人にもう一つヒントです、上海、北京と言えは？ …もうおわかりになったと思います。なにまだわからない。わかったのはおじさん達だけ。そうなのか、もうこれは懐かしいというよりは幻のものになってしまったのか。そうなのですその懐かしのサーカスがなんとバリに来ていたのです。おじさんである私は感動で足が震えるほど、そしてその震える足で入場券のVIP席 Rp10000- を買い、震える足でサーカスのテントに入りました。サーカスは西ジャワ、ボゴールからの一座でインドネシア No.1 ということでした。

サーカス会場にはUBUDのスーパー・スター・ダンサー、アノム&アユ夫妻が子供達と観賞にくるほどの人気。イヌの芸、上海雑技団のようなアクロバット、そして五頭のゾウの演技や空中ブランコなどなどの盛りだ

くさんの出し物に、観客はハラハラ、ドキドキの連続。興奮と感動の大きな拍手を送っていました。サーカスはこのあとギニアール、タバナンへと巡業したそうです。きっとそれぞれの土地で歓迎されたことでしょう。

このサーカスはバリ州が8/14～8/28までサヌールの広大な敷地を利用して開催したインドネシア共和国独立50周年記念のイベントの一つです。イベントの内容はどうか各企業や各県の産業紹介のようです。敷地には数々のパビリオンが立ち並び、連日ラーマヤナやケチャなどの芸能やカラオケなどのアトラクションが夜遅くまで催され、たくさんの人々で賑わっていました。UBUD長期滞在者ご用達のティアラ・デワタ・パビリオンではなんと生バンドの演奏で盛り上がっていました。



バリ・コレラ騒動

そういえば今年の始め頃、バリを旅行した日本人がたくさんコレラにかかり、そのうちの一人が死亡したという噂が UBUD まで届いた。成田空港には、交通事故の件数を掲示するように、コレラ患者の数を掲示していたと聞く。それはいかにもバリに行くときコレラにかかりますよ、と警告しているようなものである。日本国内にある旅行会社の窓口からはバリのパンフレットがすべて消えてしまったという。そんなニュースのおかげでバリに来る観光客が大幅に減り、ヌサドゥアのホテルや日本人観光客相手の店は閑古鳥が鳴いていたという。そして日本人専門の小さな旅行会社が倒産したという悲しい話も聞いた。

UBUD は、そんな騒ぎはどこか遠い国の出来事のように、いつもと変わらない毎日である。「いったいどこへ行ったらコレラ・チャンに遭えるの」というほど、コレラのコの字も聞かない。そして旅行者の数が減ったという印象もない。きっと UBUD に来る旅行者は情報に惑わされない、旅慣れてた恐いもの知らずが多いのだろう。変わった現象といえば、コレラ騒ぎで航空チケットが安くなったという理由からか、懐かしい友人が久しぶりに訪れたことぐらい。

そして四月になると、患者がパツパツでなくなり、コレラの噂をまったく聞かなくなった。日本人だけがかかる不思議なコレラ。あの騒ぎはいったいなんだったんでしょね。

噂ではバリ島があまりの人気なので、どこかの国が嫉妬して企んだのではないとか、飛行機の機内食ではないとか、またある筋では、ツアーで行くレストランの夕食のなまものにあたったのではないだろうか、などなど噂の種は尽きません。なまもの話となるとまず日本食店

が疑われ、きっとたくさんの日本料理店が迷惑したことでしょ。原因が発表されない状態なのでインドネシア観光局も怒っていたようです。その筋や当局では原因がわかっているはず、なぜ発表しないのでしょうか。コレラ騒動は謎のまま去ってしまいました。

コレラではなく赤痢のことで、笑える話がありました。

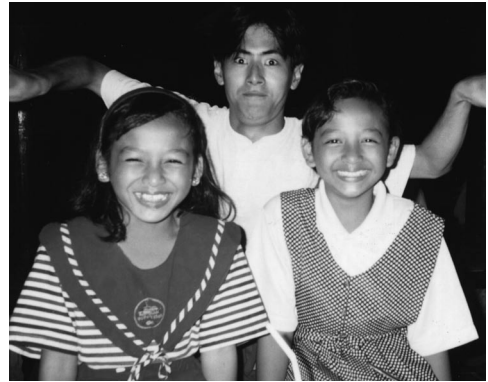
UBUD に長期滞在していた K 子は、帰国の機内でひどい下痢になり、入国時に成田ですぐ検便。そのまま自宅でおとなしくしていればよかったのに、彼女はそのまま名古屋の友人宅に遊びに行き、そのまま宿泊。ちょうど某デパートで開催されたバリフェアに絵を持ってきていたバリ人の W 君やその他友人と盛り上がっていたまさにその時。白衣とマスクで完全防備の保健所スタッフが突如として乱入し、K 子は「赤痢」患者として即刻連れ去られ、隔離病棟にカンキンされました。それだけならよかったのですが、彼女のいた友人の部屋は消毒されて真っ白。残された友人達も全員検便。ところがバリ人 W 君にとってクセモノなのは、まさにその検便で、How to のわからない（かつてしたことがない）W 君は、ほんの少～し小さいビニール袋に入ればよいだけなのに、う〇ちをポンポンに詰めてしまいました。そしてあろうことかあらかじめ袋に書いておかなければならなかった自分の名前を書き忘れたのです。あげくに名古屋の友人の C 子は W 君のホカホカのポンポンに詰まった検便袋にマジックで名前を書き込んであげたのでした。C 子は「あの時の手の感触は一生忘れないわ」と言っています。そして W 君帰国の際のパーティにはなんと保健所スタッフも参加し、友好を深めたとのこと。ちょっとクサイ話でしたね。とにかく、コレラにせよ赤痢にせよ、かかった本人もかわいそうですがまわりの人々もけっこうたいへんなのです。そこで教訓。成田で「疑いあり」の検便をしたら結果がでるまで、そのまま自宅で自己謹慎していきましょう。



GUSTI AYU SRI YULIATHI

今回の人物紹介は、ある一人の踊り子の魅力に取りつかれた日本男児が、企画し実行したものです。彼は決死の努力で楽屋まで侵入し、ツーショットを撮ったり、実家を探しあて家にまで押し掛けたり、ついには彼女を居酒屋“影武者”へ招待し会食する仲になったという、突撃ロリコンなりふりかまわぬタイプの熱烈ファンです。そんな彼がなりふりかまわず（注：これはいつもヨレヨレのジャージをはいていたり、ジャージの上ルーズな感覚でサロンをまいていたという意味です）独断で発言するインタビューです。

バリ舞踊といえばレゴン・ダンス。UBUDを訪れたほとんどの旅行者が一度は見たことのある踊りだと思えます。しかし、これぞといった踊りに接することはなかなか難しいことです。なんて評論家ぶった発言をしてしまい失礼しました。そこで今回の人物紹介は



右が、素顔のクリンチちゃん。真ん中が筆者、左側は妹です。今クリンチを踊っています。

そのレゴン・ダンスでチョンドンを踊らせたなら、今彼女の右に出る者はいないだろうといわれる素晴らしい踊り手を紹介することにしました。毎週土曜日のプラ・ダラム・プリのパフォーマンスでレゴン・ラッサムのチョンドン役を踊っている、GUSTI AYU SRI YULIATHIちゃん11才。彼女は今、将来を有望される踊り手の一人として注目を浴びています。1991年にレディースガムランのムカール・サリでクリンチ・ダンスの踊り手としてデビュー。クリンチダンスでグスン・サリとも共演。1995年4月日本公演に同行。同年7月にギャニャールで行なわれたレゴン・コンテストで優勝。現在ティルタ・サリ、ムカール・サリの定期演奏会で活躍中。先生はプリアタンの有名な踊り手アナッ・アグン・ラカ・アストウティさん。

「踊りはチョンドンが一番好き。これからもずっとチョンドンを踊り続けたい」と彼女はきっぱりと言いつ切る。実際に彼女の踊りを見てみれば、彼女のこの踊りに対する情熱が人並みでないことが理解できると思います。「趣味はなんですか？」の質問に「バトミントン」という元気な返事。そして「スポーツはなんでも好きです」という答えがかえってきました。そういえば、彼女の踊りの特徴はきびきびとして、隙のないところである。チョンドンとは女性らしい優雅さよりも、活発な動きがかえってこの役には合っていると私は思っている。そしてこれほどまでにこの踊りを感動的に見せてくれる踊り手は他にいないでしょう。

まだ彼女の踊りを見たことのない観光客の皆さん。バリ訪問の際には是非一度ご覧ください。そして彼女を皆で応援しようではありませんか。舞台の開演前に楽屋を訪ねてみてください、きっと彼女は気軽に写真撮影に応じてくれます。頑張れクリンチ!!



photo:Katsumi Ran



帰らなかった日本兵

小田蘭丸

インドネシアのテレビ局がテレビ映画撮影のため、日本人の出演者を数名募集しているという噂を聞きつけ、私はインドネシアへの日頃の恩返しと好奇心とで出掛けてみることにした。なんとオーディションもなく即合格。きっと暇な旅行者なら誰でもよかったのであろう。さっそく日本語の台本を手渡された。映画はどれもバリを舞台にした戦争映画のようである。スタッフの人に聞いたところ、インドネシアが共和国として独立するため、独立戦争に立ち上がった英雄ヌグラ・ライを主人公に、当時を再現した独立戦争の物語・仮題「Puputan Margarana」ということである。

インドネシアの独立にあたっては、残留元日本兵の功績は多大であったという。その残留元日本兵が独立軍に加わるまでの心の葛藤やその後の場面が映画に登場し、日本人の出演者は実在する人物を演じるようである。

映画の撮影に立ち会ううちに、前々から気がかりであったインドネシアの歴史の一つが紐とかれた。バリはどこから見ても平和そのものの島である。毎日多くの旅行者が日本から訪れて賑わっている。こんなバリ島に、かつて日本軍が進駐し、終戦後は残留した日本兵がここで独立戦争に参戦したと知る人は少ないであろう。かく言う私もその一人であった。そして、現在日本とインドネシアの国交が友好的に続けられる要因の一つに、この残留元日本兵の多くの犠牲があったことも知る人は少ないであろう。

バリ島残留元日本兵で独立戦争に加わり、現在も健在である平良退蔵氏と故人：阿南秋夫少佐のシーンを撮り終えたあと、偶然というよりはあまりにも必然的に、わたしの前に一冊の本が現われた。それが今回紹介する本である。

日本が敗戦し、故国日本の家族のもとに帰国できるという嬉しい心と裏腹に、日本の土を踏むと同時に敗残兵として処刑されるのではないかという心配がつのる。敗戦処理の中、帰国かそれとも苛酷な捕虜生活か、そして共に戦うことを誓ったインドネシアの人々との板挟みで選択する心は乱れる。

インドネシアは日本軍政のもとに独立を約束されていた。しかしその約束も日本の敗戦で、無残にも夢破れてしまいそうである。多くのインドネシア人は再びオランダの植民地になることを恐れ、厳しいことは充分承知のうえでインドネシアの独立に立ちあがろうと考える。そして独立には日本軍の兵器と優秀な指導者が必要であった。彼らの説得のもとに多くの残留元日本兵が逃亡兵という汚名を覚悟に、インドネシアを見捨てることができず独立戦争に参戦したのである。参戦した残留元日本兵はインドネシア国家から英雄としての勲章を授賞し、インドネシア人として生活している。壮烈な人生を送った彼らの歴史を、我々は見逃してならない。そして彼らの戦争の傷痕は今だに癒されていないことも考えなくてはならない。

著者：長 洋弘が太平洋戦争、敗戦、独立戦争という状況下をくぐり抜けた残留元日本兵の生命力とたくましさ感動し、彼らの波乱の人生と叫びを残したいと、十年の歳月をかけて取材した、貴重な記録である。バリをこよなく愛する諸君、是非一読することをお薦めする。

発行所：朝日新聞社

発行日：1994年8月15日 第一刷

バリ人の四人に一人がワヤンさん

名古屋生まれのスードラ

バリにはカーストがある。ブラフマ、クシャトリヤ、ウェイシアの上位三つと平民階層のスードラとに分かれる。バリのカーストはチャトル・ワルナといわれ、上下関係ではなく色分けされた横一線の関係であるという話を聞いたことがある。私もそんな印象を受けている。現在はそのうちのブラフマ階層のブダダ（高僧）以外は形骸化され、残っているのは階層によって使い分けられるバリ語と名前に付く名称だけのようである。カーストによって生じる差別的人道的弊害はまったくないように思われる。

バリ人の90%をしめているのが平民階層のスードラであり、そのスードラの第一子はワヤンと名づけられる。プトゥーもあるがほとんどがワヤンである。男性にはI（イ）女性にはNi（ニ）が付きイ・ワヤン、ニ・ワヤンとなる。

驚いたことに Vol.9 で紹介したチャカプンの村、ブダクリンにはブラフマ階層にワヤンさんがいた。この名前の由来を調べてみるのもおもしろいかもしれない。

第一子のワヤンから始まりマデ、ニョマン、クトゥツと四つの名前が決まっている。そして、五人目は再びワヤンとなり繰り返される。子供が五人生まれるとワヤンが二人いることになる。スードラの1/4がワヤンということは、バリ人の22.5%がワヤンである。そこで単純に計算してみると四人に一人がワヤンさんということである。

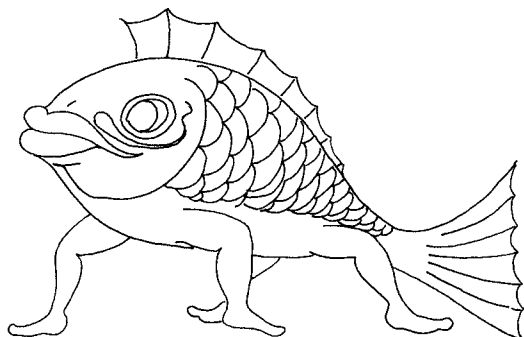
ワヤン・カルタ、ワヤン・プスワテイなどとワヤンの後に名前は続くのだが、みんなそれと呼ばれるのより、ワヤンと呼ばれるのが嬉しいようである。ちなみにバリの人がワヤンを呼ぶときには、ワを省いてヤンとよんでいる。バリでは名前は後を重要視しているようで、イブ（お母さん）が“ブ”に、パパ（お父さん）パになってしまう。

私が UBUD に来て最初に知合ったのがワヤン君であった。彼は日本語を話すことができるので、私は安心して彼の家を訪ねることにした。そして「ワヤン、

ワヤン」と連呼した。家の人は不思議そうにそして困ったような顔をして私を見ている。そのうち私が日本語しか話すことができないのを察してか、日本語のできるワヤンを探してきてくれた。私はてっきりワヤン君は一家に一人で、すぐに見つかるだろうと思い訪ねたのであるが、その家族は大家族でワヤンはたくさんいたのである。UBUD に来て早々の失敗であったが、そこでなんとプリ・サレンのマドンナ、ゲンマニに出逢うという幸運に恵まれたのでした。

そのワヤン君の運転手をしているワヤンさんの息子のワヤンが、ワヤンちゃんと結婚して長男ワヤンが誕生したのは、つい最近のことです。お爺さん、お祖母さん、お父さん、お母さん、その子供、さらに孫までワヤンということもある。今後、核家族化すると、ますますワヤンが増えて人々は戸惑い、その結果バリ人の名前が変わることも考えられるのだろうか。興味のある問題である。

この原稿を書き終えたところに、シンガラジャのゲデ君というバリ人の友人から、オダランがあるから遊びに来いと誘われた。改めて彼にカーストと何番目の子かと聞いたところ、カーストはスードラで長男だという。待てよスードラの長男はワヤンではなかったのか、もしくはプトゥーでは。問い正したところ、シンガラジャではほとんど第一子は男姓はゲデで女姓はルーダという。おいおい、せつかく四人に一人がワヤンだと思いこんでいたのに。…ということは、よその土地へ行くとまた名前が違うということもありうるのか。も～う、これだからバリはやめられない!!



Illustr: M. Ohhara

物売り撃退法

ゴクツ一編集部

いかにもレストランの関係者でありますという顔をして、一人の男が立っている。私は外の景色を見たあと店内に目を戻した。すると、立っている男と視線が合ってしまった。男は「あれは日本人のA氏の持ち物だ」と話し掛けてきた。そういえば目の前にあまり上品とは言えない大きなホテルが建っている。この時、私は日本人であることを隠したいと思った。これがきっかけとなって、男は小さなノートを持って私のテーブルに近づいてきた。そして日本人の友人が書いたというメモを見せてくれる。メモには日本人以外に他の国々の人からのメッセージが、それぞれの国の言葉で書かれてある。読んでいるうちに男の人柄や仕事のことがわかってきた。やっとここで男の正体に気がついた。どうもこやつはシルバーを商売しているようだ。店はどこにあるのかと聞くと「あっち」と指差す。「食事のあとで店に寄るから」というと、「今ここで見てくれ」といって、いきなりケースを持ち出して来て、テーブルの上に広げ出した。むーん街で見かける物売りと同じ箱型ケースだ。そして男は手ごろの値段を言い、あまり強引に売ろうとしない。「家で家族が作っている。ここは街とは違うから安いよ」といいながら売る、新手の物売りであった。

こんな物売りは優しいほうである。UBUDでは見かけないが、クタはもちろんのことタナ・ロットやキン

タマーニなどの観光地に行くと実にしつこい物売りに合う。

知らない素振りができればよいのだが、いたって気の弱い日本人にとっては、もっとも苦手なのはこの物売りである。しつこい物売りに出会ったことが原因となって、パリが嫌になってしまった観光客もいる。

ましてやいたいけな幼い子供達の物売りに出会ってしまうと、もうダメである。一つ買ってあげればもう誰も売りにこないだろうと、欲しくもない土産を優しい気持ちで一人の物売りから買ってしまおう。その優しさが裏目にはまり、あたりにいた物売りがゾロゾロと集まって来てしまう。そして「私からも買ってくれ」とせがむ。「もう買ったからいらない」といっても、「まだ私からは買ってない」と訳の分からない理由で困らせる

こんな物売りから逃れる方法はないものだろうか。やはり無視するしか方法はないのだろうか。しかしそれではあまりにも人間的ではないと思う人には、インドネシア語で「Tidak Mau(いらない!）」と一言。けっして「あとで!」なんてその場しのぎの言葉を使わないこと。彼らはその言葉をしっかり覚えていて「あとでといったではないか!」とつきまっとなってくる。確かに「あとで!」といわれれば、あとで買ってくれるのだろうと思いつているのも一理である。発言は慎重にしましょう。

シェンエン、シェンエン、スゴクヤスイよ。
あなたのネダンはいくら?



Pちゃんのホリデーのすごし方

パンパカパンパ〜! ウブドフリークの皆さま、またまた登場してしまいました。もうすっかりおなじみとなった「Pちゃんのクタクタ」コーナーはこの極楽通信の片端で、着々と愛読ファンを獲得し書きおろし本出版への道を1歩1歩、歩んでおります…というのは全くのPちゃんの希望にすぎませんが、とにもかくにも第3回目まで載せて頂き、有難うございます。初心を忘れずに執筆に励むPちゃんでありたいとおもいます。

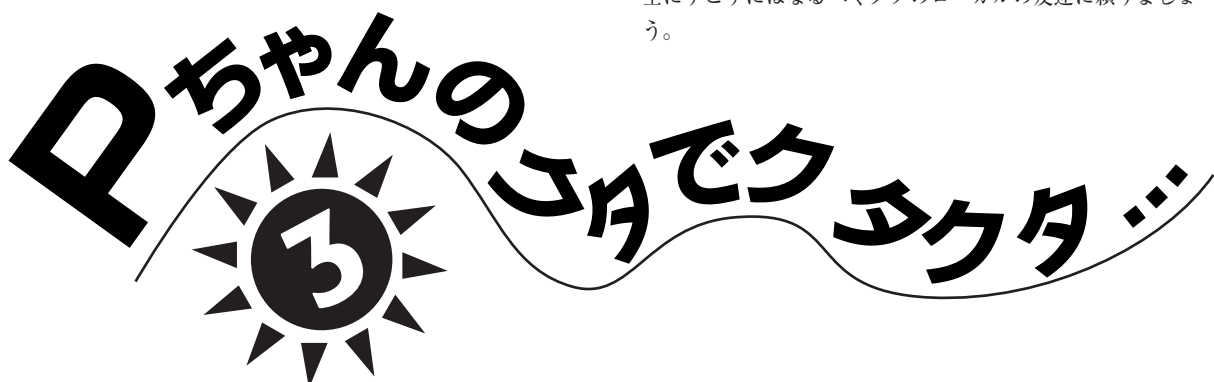
ところで、今日のクタクタ話は私の限りなくホリデーに近い1日のスケジュールを紹介してみようと思います。いきなり私事をずらずら〜と並べたてる訳ですが、客観的に私の生活をしみじみ眺めてみたら、ローカルでもなく、かといってツーリストでもない、中途半端な位置に属する面白い立場の日本人の象徴のようで、読者の皆様の中には同じような1日をすごしている人も中にはいらっしゃると思いますし、また、クタの日本人の様子も少しは理解していただけるのではないのでしょうか。

まず、朝は午前9:00そこそこに起床。そのまま砂糖なしのコピを飲みながらほけええ〜と私の愛犬「ぶち」と「チャーリー」を鑑賞。どちらもバリ犬ですが、「チャーリー」はキンタマーニ犬、「ぶち」はその辺ののら犬によくいるタイプの目と鼻の間がしわくちゃで一見しかめ面の様な不細工な犬です。でも私にはその不細工さがとても愛しいのであります。昼頃にナシブククスを食べてバイクにまたがり、クタへと出発。バイパスの汚い空気を思いっきり肺まで吸い込みつつ、バイクをかつとばしばながら、クタの知人の洋服屋さんに到着。そこで長旅の疲れを癒やす為、となりのワルンでティーボトル(400rp)とチョコドーナツ(200rp)を買って店頭のベンチで休みます。つかの間のリラックスタイムの後、おもむろにその洋服屋に上がりこみ、日本人の意見という事で偉そうに店のディスプレイに文句をつけ始めます。「こんなじゃ売れやしない」とか「これじゃあお客さんが気づかない」などとさんざん嫌味を言った後、私だけすっきりした顔で読書タイムに入ります。店の前で読みにふけていると、時折、子供サーファー達が「Hello. JUNKO. コンニチハ」などと声をかけてくれるので、ひとしきり雑談をします。その内に日本人のお客さんがやってきて、私を発見し、「この人日本人

みたいだけど…」と怪訝そうな顔をするので、こちらから「こんにちは。いらっしやいませ。」と言ってみます。すると必ず「ああやっぱり日本人ですか。ここのお店はあなたのものですか。」と決まって質問されるので、「いいえちがいます。ここのお店の家族と知り合いなのです。」とこちらも用意していた答えを言います。そしてしばらく日本人との雑談にふけり、またまた読書タイムに入ります。そのうちに必ずなんとも言えない心地よ〜い眠けに襲われるので、私はたまたま、店の裏のニョマンの部屋の鍵を勝手に開けて、勝手にベッドで寝ることにします。ニョマンは高校生なので、午後じゅう家にいないので、私は大きな顔でベッドに横たわり、5:00すぎまで口をバカ〜と開いて眠りこけてしまいます。そして目が覚めた時はいつも、夕方まで寝すぎてしまったと日本語で言われてしまい、仕方ないので「オハヨウ。グッドスリーピングよ。」などと一生懸命笑いを取りつつ、とっととお店の中に入ります。そこでコココーラ(600rp)を一気に飲み干しつつ、「今日はいくら売れてるの〜。」などと話題を作って眠っている頭を起こします。そうこうしているうちにサンセット1時間前位になったのでビーチに行ってみますと、長期滞在サーファーのユウコちゃんとエミちゃん、ミチちゃんに会いました。そこでまたまたくっちゃべっていると現地サーファーのスイトラくんが屋台でジャグン(やきとうもろこし)を買ってきてくれました。それを食べながらサンセット前のサーファー達を鑑賞します。辺りが暗くなり、海から皆が引き上げてきたので、夕食をどこで取るうか打ちあわせをし、私は約束の時間まで友達のホテルにお邪魔することにしました。そこでスタッフやら宿泊客やらとまたまたくっちゃべっているうちに夕食の時間となり、ナイトマーケットという格安でおいしいレストランに行きました。そこで5、6人、多い時は10人位の友達と1つのテーブルを囲み、シーフードから肉類やらを食べてビールも飲んで1人7000rpくらいというこの安さ。庶民の味方のレストランを上手に探して上手に節約し、ウブドでの滞在費にまわそうというPちゃんです。

そしてp.m10:00すぎに店を出て、バイクにまたがりつつ、大声で「バイバーイ。バイバーイ。またあしたね〜!!」を連発しつつ、30分間バイクをぶっぱなしてヌサドゥアの家に戻ってゆくPちゃんでありました。アブナイ、アブナイ。

さあ、Pちゃんのごくごく個人の1日のスケジュールでしたが、楽しく読んで頂けたでしょうか。なかなかクタも捨てたものではないですよ。ただ、クタで面白おかしく快適に安全にすごすにはなるべくクタのローカルの友達に頼りましょう。



Mandi Sore (夕方マンディ) のすすめ

バリ人はきれい好きだ。え？服がボロボロで汚いじゃないかって?! ようく見て(匂って?) みよう。確かにボロボロだし、しみだらけだし、ほつれているし、時には穴があいてたりする。しかし、彼らはちゃんと洗濯して、アイロンまでかける。それに(例外はあるが)決して臭わない。彼らは自分のからだや着ている服が臭くならないように、とても注意している。

彼らは一日に2回、マンディ(水浴び)する。起床後、あるいは朝のひと仕事を終えてから、まず一回。そして大切なのは、夕方のマンディだ。仕事や用事で外出している者たちは、日が暮れる前にはたいていマンディのために帰宅する。もしくは外出先ですませる。汗をかいたら、一日に何度もマンディする。

おもしろかったのは、あるバリ人M君。日本人の友だちが泊まっている宿で、初めてバスタブに入った。かなりぬるめのお湯だったにもかかわらず「熱い、暑い」を繰り返して、10分ほどたったところでのぼせてしまった。…で「汗かいたって」と言って水でマンディしはじめたのだ。あーあ せっかくのバスタブで気持ちのいい湯あがりを経験してほしかったのに…。

それはさておき。

とにかく、ここでみなさんにぜひおすすめしたいのが、夕方のマンディ。バリの人々も、日が沈む前にマンディをすませ、さっぱりしたところで、あらためてブラブラ外出したりするわけだ。夕方の挨拶にもなっている「Sudah Mandi?」(マンディした?)の間にも「Belum!」(まだ!)と答えようものなら「早くしなさい」と忠告される。彼らにならって、夕方のマンディ・タイムは、私たちもゆっくり・のんびりすごしてみよう。そして、おしゃれをして出かけよう。ダンスを見にいくもよし、誰かをさそって晩ごはんもよし。洗った髪がまだ濡れていたっていい。昼間は暑くて着られない、長そでのシャツなんかを、胸のボタンを少しはずして着てみよう。男性諸君もオーデオロンをつけてセクシーにキメてみては? バリではちっともイヤ味じゃない。それくらい主張しないと、空気の濃さに負けてしまう。バリの夜はひんやりせずしくて、恋人とすごすにも、恋人をさがすにもちょうどいい。ゆめゆめキタナイバック・パッカーのように、クサいままダンスや食事に恋人をさそってはなりません。

きれい好きのバリ人をみならって、夕方になったら、さあ Mandi しよう!

●水浴のスケッチ●

<出典/原本>

[Island of Bali]

Miguel Covarrubias

London:KPI.

<日本語版>

「バリ島」

ミゲル コバルビアス著

平凡社



UBUD よろず百科

MASSAGE



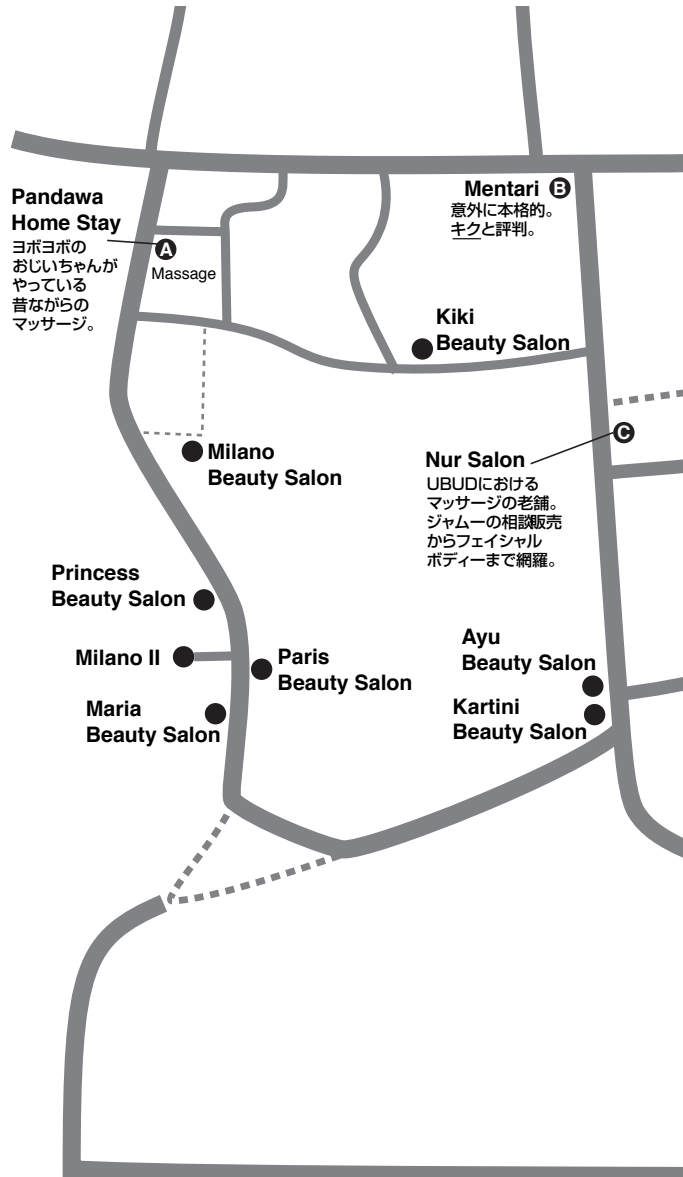
バリでエステを。ん？ エステ？ 冷たいティーのことはありませんよ。

そう、バリは今、エステティック・ブームのまっ最中。ヌサドゥアやクタにはリッチな観光客をターゲットにした、エステティックやタラソテラピーのサロンが、ぞくぞくと OPEN し毎日大盛況のようです。ヌサドゥアの高級ホテルだけにお泊りのオネーサマ方には、ちょうどよいヒマつぶしになるのでしょ。

そして UBUD にもそんなヒマつぶしをするオネーサマ方がいるのか、フェイシャルやボディーのエステティック、それにマッサージができるビューティー・サロンが増えてきました。といっても、ヌサドゥアのような超リッチな施設とは遠く遠く限りなく遠く、かけ離れた施設ですけどね。

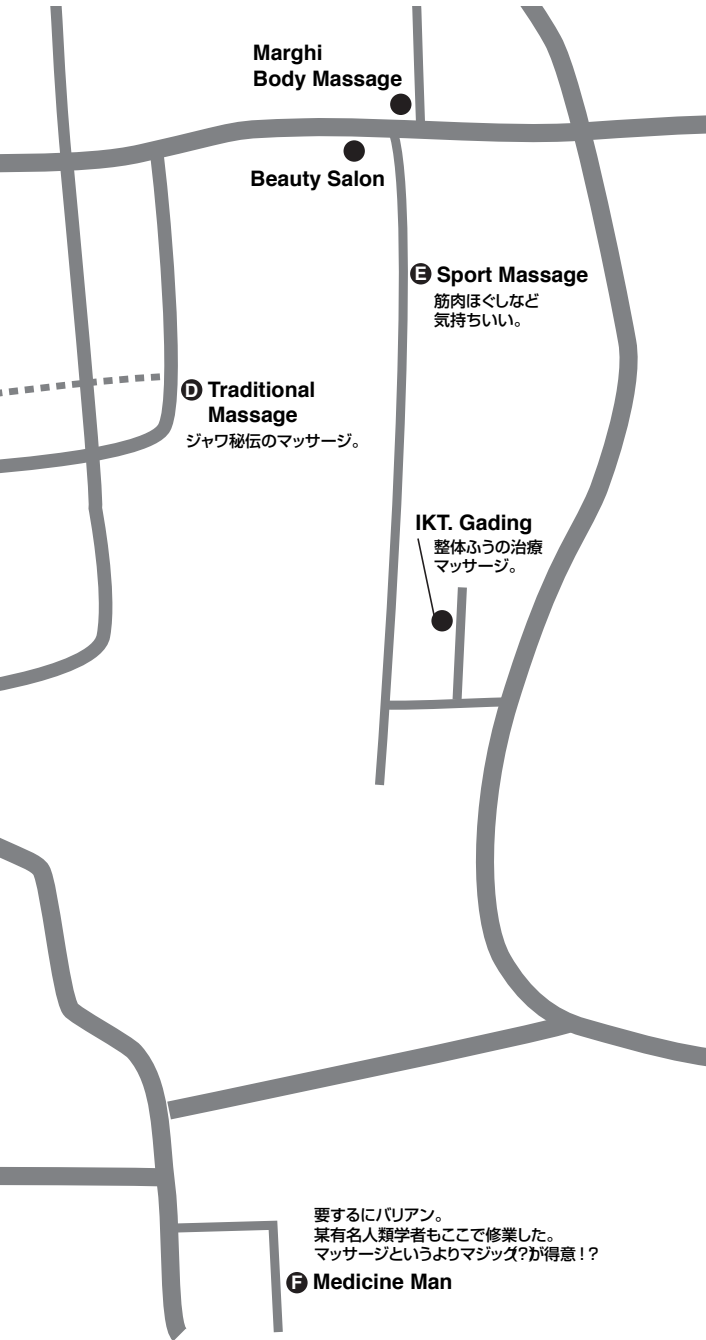
UBUD にはずーっと以前から、バリアンと呼ばれる呪術師のする治療のためのマッサージ、そしてふつうの家のふつうのおじちゃんやおばちゃんが、神から授かった不思議パワーで治療をしてくれるマッサージがあります。そしてちょっと前にジャワから伝わった整体やスポーツマッサージをするところもできました。そして今、女性のあくなき美への追求からか、美容マッサージが大人気のようなのです。

そんな噂を聞きつけて今回ののは、「旅をしながら美しくなろう」という欲張りな女性のために、マッサージ及びトラディショナルを含めたエステティックのサービスがうけられるところを紹介することにしました。“リラックス・プレイス UBUD で心身ともに美しくなろう！”



F.





A.



B.



C.



E.



D.



第6章 鉄の肝臓

強力な二日酔いでうわんうわんする頭をかかえ、ダイニングルームでコーヒーを飲んでいると、イギリス人のリサだかりタダかが声をかけてきた。彼女は私好みのちょっといい女だ。

「一体、昨夜はどうしたのよ。」

「うー、御免。飲みすぎたらしい。ニョマンは俺を起こしに来たのか？」

「みんなで行ったわよ。なのにあなた全然起きないんだもの。」

「うー、面目ない。」

「ほんとうーに、良く飲んでたもんね。」

「うー、ただの酔っぱらいのおっさんだった。忘れてくれ。」

ダイニングルームから戻る途中で、トーマスが声をかけてきた。

「一体、昨夜はどうしたんだ？」

「うー、御免。飲みすぎたらしい。みんなで起こしに来てくれたんだって？」

「ああ、なのに全然起きないんだもんな。」

「うー、申し訳ない。」

「あれだけ飲めば誰だってああなるよ。」

「うー、すまん。忘れてくれ。」

自分の部屋のテラスで煙草を喫っているとダニエルがやって来た。

「ジャパニーズ、あそぼーっ！」

「うー、悪いけどサッカーは出来ない。」

「じゃあ、ブンコスごっこしよーっ！」

「うー、それならいい。」

ご自慢のプラスチック製ワルンを持って来たので少し遊んでもらうが、私の乗りが悪いせいかダニエルはすぐに飽きてしまい、ゲームボーイを持って来てピュンピュンやり始まった。電子音がこめかみに響く。

「ダニエル、ジャパニーズはちょっと出かけなくちゃいけないから、又、後でね。」

「うん、気にしなくていいよー。」

ガムランのレッスンを受けるべく、アノム宅に行こうとしてホテルを出る所でニョマンが声をかけてきた。

「ヒロシユ、昨夜はどうしたんだ？」

「うー、御免。久しぶりにやっちゃった。みんなで起こしに来てくれたんだって？」

「ああ、まるで死んでるみたいだったぜ。」

「うー、すまん。忘れてくれ。」

「魚は全部喰っちゃったよ。」

「うー、食べたかった。」

こんな酷い二日酔いは久しぶりである。仕事だったら迷わず休む所だが、ガムランとなれば話は別だ。這っ



南部
弘

ビンタン
涅槃集

3

でも行く覚悟で出発したが、やはり途中で具合が悪くなり、何度か顔見知りのいる所で休ませてもらう。おいおい、ギターなんか持って来るな。青色吐息で到着した時は予定より30分近く遅れていた。

「遅くなって申し訳無い。」

「どうしたんだ？ 顔色が悪いぞ？」

「気分が悪くなって途中で休んでたんだ。この暑さの中を歩くには辛い距離だ。」

「そうか。それじゃあ、よかったらここに来るか？」

「え？」

「二部屋あるゲストルームの片方が空いているんだ。」

願ったり叶ったりである。今の滞在先の予約がきれる明後日から世話になる事にする。

レッスンは復習を中心に行われた。しかし、どうも上手く思い出せない。複数のフレーズが一つになってしまい、途中でどのフレーズを弾いていたのかわからなくなってしまうのだ。困った。

「混乱してるか？」

「混乱してる。楽譜はないのか？」

「ない。」

自分で工夫するしか手はなさそうだ。間違える度に最初から何度も繰り返していたのでは埒があかない。1フレーズ毎に区切って演奏してもらい、自分なりの採譜をした。全てのフレーズを弾ける様になってから、

第7章 2缶の靴クリーム

それを繋げて曲として弾ける様にするという、私が考える所の最も効率が良いと思われる手段を取る事にしたのだ。教わる身でありながら先生に向かってあれ弾けだのこれ弾けだの、もう一回最初からだの指図して、あげくの果てには練習の仕方まで勝手に決めてしまうなんて、なんて勝手な生徒なんだろう。

一応、一通り採譜が終わり、気がつくときを過ぎていた。

帰り支度をしているとアノムが、昼食を一緒にどうだ、と誘ってきたので、有難くご相伴に与かる事にした。「何がたべたい？」

「んんん、サテがいいな。」

使用人のマデが買ってきたサテは非常に美味しかった。結構、食が進む。さすがにご飯は炊き立てという訳には行かないが、作り置きのおかずと一緒に、思いもよらず美味しい昼食を頂いた。

まさかな、と思いながらハヌマン通りを歩いていると、そのまさかがやって来た。勿論、私をこんな酷い二日酔いに追い込むきっかけを作った張本人、ブロックだ。

「へーい、ヒロッシュ、ダブル・キーウィー？ハハハハ！」

やめろー、俺を殺す気かー。

「ブロック、お前あれだけ飲んでなんともなかったのか？」

「朝少しだけ気持ちが悪かったけどな、もうこの通りだ。飲むかー？」

「俺、あれから又飲んでな、えらい目に遇った。今日ダブル・キーウィーなんか飲んだら身体がおかしくなっちゃまうよ。」

「へーい、ヒロッシュ、ゲコゲコ、ハハハハ。」

それでもビンタン位は飲みたいな、と思い、途中で影武者に寄る。

「昨日はどうも有り難う。助かった。ビンタンのスモールボトルを下さい。」

「ごめんなさい、小さいのは切らしちゃってるの。大きいのならあるわよ。」

「うー、挑戦してみる。」

と言いながら、結局2本程飲んでしまった。そんなに命を縮める理由がどこにある。

明後日からアノム宅に邪魔する事を話すと、ユミさんがやたらと羨ましがる。

「いいなー、南部さんが出たら私が入ろうかなー。」

アノムの写真がプリントされたTシャツ着て、アノム宅近辺をうろろしてたら、いかがわしい事この上無い。やめときなさいって。

今日のガムランのレッスンは、フレーズを繋げて曲の形を把握する事にかなりの時間を費やした。どうもアノムは弾く度に繰り返しの回数が変わる様な気がしてならない。しかし、フレーズの繋ぎが出来ないのに先を急いでも仕方無い。とにかく、次のフレーズに滑らかに入れる様に練習する。アノムは早く次の曲に取りかからせたいらしく、トペンのフレーズはこうだ、などと教えてくれるが、今、他の課題を与えられても消化しきれない。取りあえずパリに絞ろう、とお願ひする。

なにせ私はガムランは初心者なのだ。パリスのみに絞ったって、たった10日足らずでバリ人と同じ様にガムランを理解して楽器を弾ける様になれるとは到底思えないが、私の目的はそんな所には無い。勿論、やるからにはせめて一曲位は最初から最後まで弾き通せる様にはなりたいが、目標を設定してそれに少しでも近づく為に鍛練を繰り返す。この鍛練自体が目的なのだ。じゃあ、それが出来て一体何の得になるっていうんだ、と言う奴は、自分で出来ると分かっている範囲内の事を可能な限り短時間でこなす努力だけしている。別に、それも悪いとは言わない。(それすらやらない奴は論外である。)通常、我々が仕事をする時にはそういう態度を求められるし、又そうでなければ困る。プロフェッショナルへの評価は結果に対してしか下せないからだ。でもそこには鍛練がない。あるのは要領よくこなす技だ。技は人を磨かない。技を磨こうとする鍛練が人を磨き、技術を磨き、最終的にはそれが技に繋がるのだ。はい、これがレゴンのテーマですよ、これがトペンのイントロですよって出来たからどうなるってもんでもない。ただ虚しいだけだ。

帰り際にアノムが、今日の4時半からクトゥ寺院の集會場で練習があるから見に来ないか、と言ってきた。勿論、ご招待は有難く受ける事にした。

酒類を売っているスーパーに入り、ダブル・キーウィーを捜す。あんな酷い目にあつたのに、本当に俺も懲りないな。ところが酒の棚には見当たらない。うろろしていると店員がやって来て、何捜してるんだ、と聞いてきた。ダブル・キーウィー、と告げると、一寸待ってる、と言い、日用雑貨のコーナーからニコニコしながら戻ってきた。両手に一つずつ小さい缶を持っている。靴クリームだ。

ダブル・キーウィー

そりゃ確かにそうだけども、まいったな。

ホテルに戻る途中でやっぱりブロック達につかまった。今日は体調が回復しているので騒ぐ事にした。目の前にあるカセットショップの店員もやって来る。い

いのか、店番しなくて、と言うと、シャッターを閉めて戻って来た。おいおい。スパンキーが立ち上がり、手を伸ばしてランブータンの実をもぎ取り私に渡す。そういうもんなんだなって気がする。

トイレに行きたくなったのでこの辺にないか、と聞くと無いという。

「その裏手でしちやえよ。」

「だって、これお寺だろうが。罰が当たらないか？」

「大丈夫、大丈夫。俺達もやってるんだから。お前に罰なんか当てさせないよ。」

まさかバリーで立ちションする羽目になろうとは。

できるだけ罰の当たらないような場所を選び、「御免なさい」と言ってから解放される。

面白そうな観光客が通ると、一杯飲んでけよー、と声をかける。アメリカ人のおっさんが立ち止まった。彼はテキサスから来た、と言った。

「ヘーイ、イッキ、イッキ。」

「イッキって何だ？」

「ん、ぐーって空けろって言ってるんだよ。」

ぐーっ。

いい飲みっぷりである。

「おい、そのギターちょっと貸してみろ。」

頭に赤いバンダナを巻いた髭もじゃのテキサス人がギターを持つと、かなり様になる。と、いきなりカントリーウエスタンをえらい勢いで弾き始まった。げ、上手い。

「随分と上手いな。ひょっとしてプロなんじゃないか？」

「ん、プロだ。」

なんだか、どこかで見たような顔だったが思い出せなかった。10分程で彼が帰ってから、茫然としているスパンキーに話しかけた。

「おい、スパンキー。さっきの見たか？」

「見た。」

完全に毒気を抜かれている。

「上手かったな。」

「どうやって弾いているのか分からなかったけど、凄かった。」

時計を見ると4時になっていた。スマラ・ラティーのリハーサルが行われる集会場まで歩いて丁度良い時間になったので、またな、とその場を離れる。

クトゥ寺院の集会場では既にリハーサルが始まっていた。スマラ・ラティーの演目には必ずパリスがあるので、実際にパリスを演奏している所が見れるかな、と思ったのだが、残念な事にガンサはセットされていなかった。どうもホテルかどこかでやるダンスの振付の再確認をしているらしい。アノムは腕を組みながら厳しい表情で演出のチェックをしている。とても気軽に声なんかかけられそうに無い雰囲気だ。振付の確認

が終わり、バンドが他の曲を演奏し始めると、4歳になるアノムの息子が踊り出した。とたんに顔がほころぶ。こうなると普通のお父さんだな。バンドのみんなもニコニコしながら見守っている。

一時間程でリハーサルは終わり、ミーティングが始まった。邪魔になりそうなので帰る事にした。明日からはアノム宅に世話になるのである。ホテルに戻って散らかし放題にしてある荷物を少しでも整理しなければ。

第8章 ママのお迎えだ！

遅い。もう約束の時間を45分も過ぎている。

今日からアノム宅に厄介になる予定なのだが、使用人のマデを10時に迎えに寄越すと言うのでホテルで待っているのだ。

影武者でその事を話したら、「時間通りには来ないと思った方がいいわよ、20分位は遅れるんじゃない。」

と、ユミさんが言っていたので、まあ、30分迄は待ってしようと思っていたのだが、それにしても遅すぎる。それならホテルの車を使えばいいじゃないか、と思うかもしれないが、ニョマンは車を持っていない。彼の名誉の為に断っておくが、殆どのバリ人は車を持っていない。必要な時にレンタカーを借りるのだ。それに先程からホテルとは言っているが、このホテルは日本でいうと民宿から毛を抜いたようなもので（失礼）、当然、迎車なんか無い。これは奥さんのウリの名誉のために断っておくが、ニョマンも、ここはホテルじゃ無いホームステイだ、と言っていたし、ウブド近辺で迎車のあるホテルがあるとしたら、超高級ホテルのアマングリか、クブクブ・バロン位のものだろう。ちょっと剣呑かも知れないがすでに書かせてもらえれば、ウブドの人達の一部には、そういった超高級ホテルに泊まっている旅行者を毛嫌いしている節も見受けられる。ビーチエリア辺りでは、金持ちと見れば何とか少しでも多くの金を払わせようとしてご機嫌を取ったり、知り合いになった観光客のホテルに日々参上し、ゴマのハエもどきの事をする輩もいる様だが、ウブドの人達はそこまでさばけていない分だけ、変に反動が出てしまうのだと思われる。ある奴は、クブクブ・バロンに宿泊している観光客を見て、あんな所に一泊でもしようとしたら、俺達3ヵ月も毎日ただ働きをしなきゃいけないのに、なんだか面白くないよな、と言っていたので、それじゃ、泊まらないまでもカフェにでも行ってみるか、と誘うと、あんな所になんか行きたくないよ、と、きっぱり断られた。

ちょっと話が横道にそれてしまった。

一時間待たが来ないので、諦めて歩く事にした。ニョマンはあいにく外出して不在だったが、ウリが、ダニエルと遊んでくれてどうも有り難う、近くに来たら寄ってね、と言ってくれた。勿論、そのつもりだ。使用人と宿泊客達に挨拶してホテルを後にした。

パリに来て12日目。最初は小さな旅行鞆一つだったのだが、大分荷物も増えてきた。ストラップがぐいぐい肩に食い込んでくる。おまけにこの暑さ。オー、ジーザス！まるでゴルゴダの丘を登るキリストの心境だ。どこに俺のペロニカはいる？

1キロ程歩いて道端で休んでいると、ようやく白タクが現れた。地図を見せて、ここまで行きたい、と言うと、5000ルピアだという。おいおい、もっと長距離を3500で行ってもら

た事があるぞ、と言っても頑として譲らない。こっちが困っている事を知っているのだ。仕方ない、俺の移動の為には3000しか払わないが、1000をこのくそいまましい荷物の為に、残りの1000はこのボロ車の為に払ってやる、と言う事で紳士的に商談は成立した。

アノム宅に着いて遅くなった事情を説明すると、どうも言葉の行き違いがあったようだった。しかし、何となくその日のアノムのマデに対する態度が厳しかった様な気がするの、私の気のせいだったのか。

部屋に通してもらい、荷物を放り込んで昼近くからレッスンをやる。まずは手慣らし程度に軽く復習する。

マデに昼食を買いにいかせるから一緒にどうだ、何が食べたい、と聞かれたが、良く分からないからアノムと同じ物にしてくれ、とお願いした。マデがブンコスして来た御馳走は、汁気の多い、スパイスをきかせたグリルド・チキンといった所か。他にも2、3種類のおかずが一緒にの包みに入っている。もう一つの包みはサテ。私のお気に入りだ。サテにビンタンがあれば申し分無い。

グリルド・チキンの包みに入っていた、もやしとほうれん草（だと思）といんげんの輪切り（だと思）の炒め物を口に運ぶ。とたんに、

か、か、か、か、か、か、辛いっ！ひっ！ひっ！ひっ！

「あっ！ヒロシュ、これ食べたのか？」

「何なんだ、これは。」

「これは食べちゃだめだ。ほら、こうやってよけて食べ

るんだ。」

いんげんだと思っていたのは、どうやら青唐辛子だったらしい。早く言ってくれよ。

昼食後、少し休んでから再びレッスン。昨日も思っていたんだが、次の展開に入るまでの繰り返しの回数とその時々によって違う様な気がして仕方がない。そのうち、ちょっと見てみる、と言ってアノムが私の演奏で踊る。

「ヒロシュ、違う違う！」

「だって、さっきはこうだったじゃないか！」

「俺が腕をこう持ってきたら、次に行くんだ。」

「……………あーっ！ひょっとして、ダンサーがコンダクターになるのか？」

「そう！そうだ。」

「つまり、いくつかの基本的なフレーズがあって、どのフレーズの後にどのフレーズが来る事は決まっているけれど、それを何回繰り返すかはダンサーの踊り方や合図によって決まるって事なのか？」

「そう！その通りだ。」

「わかったーっ！」

全ての謎が解決した。目から鱗が落ちた思いだ。しかし新たな問題が発生した。絶えずダンサーの一手一投足から目を離してはいけないのだ。と、いう事は、楽器を演奏する事だけに集中してはいけないという事だ。

手元を見なくても弾ける様にしなくてはならない。個人練習が必要だ。只の繰り返しの練習にアノムを付き合わせる訳には

行かない。

「暫くは一人で練習する必要があるから、付きっ切りでなくてもいいよ。」

「そうか。今日からは好きな時に練習してくれ。ヒロシュがガンサを弾き始めるのを合図にしてレッスンを始めよう。」

私にとっては願っても無い事だが、この一言が厄いし、アノム一家は向こう一週間、私のへたくそな演奏に悩まされ続けられる事になる。例えば、1日に4時間から5時間、「猫踏んじゃった」だけをピアノの初心者が弾いているのを聞かされたら、普通の人間だったら気が狂ってしまうだろう。アノム一家のみならず、隣近所も良く我慢してくれたものだ。感謝。

一人でたっぷり2時間も繰り返し練習しただろうか。効率が落ちて来たので終わりにした。



夕食を食べる為に（酒を飲む為に）レストランに入り、アヤム・ゴレンとサンミゲールビールをオーダーする。この店にはビンタンがなかった。なんてこった。

食事が済んでプラムを飲んでいて、3人の若い地元民と食事をしていた40代半ばの客の一人が話しかけて来た。カナダから仕事で来ており、もう3年近く滞在していると言う。酒を飲みながら世間話をする。

今、バリ人の家でガムラン音楽を教えてもらっているんだ。俺はロックも演るんだが、ロックをガムランの方法論で演奏したら面白いだろうな、と言うと、彼は身を乗り出して来た。

「君に遇わせたい人がいる。ロバートというこの近くに住んでいるイギリス人の作曲家なんだが、西洋音楽とガムラン音楽を融合させようとしているんだ。」

「話しをしてみたいな。」

「よし、行こう。」

「今からか？もう11時過ぎだぞ。」

「構うもなか。」

彼の乗ってきた車に3人の現地人も一緒に乗る。ロバート氏の邸宅は私が金縛りにあったホテルの近くにあった。「この辺りに泊まっていたんだが、金縛りにあった。」

「カナシバリって何だ？」

「心霊現象の一種だ。目は覚めているんだが、身体が自由に利かなくなるんだ。」

レヤックだ、と、運転している若いバリ人が事もなげに言う。

ロバート氏は思っていたよりもオープンな人柄だった。歳は40代後半位か。玄関に続いている広々とした居間に案内され、お互いに自己紹介をする。

世間話をしている時はにこやかだった顔も、音楽の話になると途端に変わる。足を組んで、左肘をソファの肘掛けに乗せ、左手は左の頬に、伸ばした人指し指はこめかみにあてながら神経質そうになる。

「西洋音楽とガムラン音楽とは余りに考え方が違いすぎる。先ず、小節を区切る事が出来ない。もし、譜面を書こうとしたら一小節毎に拍数を変えなくてはならないし、演奏する楽器のパートによっても異なってくる。」

「うん。同じフレーズを繰り返し演奏している楽器があっても、その上に乗ってくる装飾音によって拍子の取り方が微妙に違う様な気がする。」

「そうなんだ。それに、音階が西洋の楽器では再現出来ないんだ。」

「ガムランは通常五音階だな。」

「そうなんだが、五つの音の間隔が、西洋の十二音階で表現しきれないんだ。」

「そうなのか？まだ俺はガムランの楽器を他の楽器に置き換えて考えた事が無いから、良くわからないが。」

「勿論、似たような音階を作る事は出来るが、ちょっと感じが変わってしまう。」

「ガムランの音階自体は、日本の沖縄民謡の音階に似ているな。俺達日本人には親しみ易い音階だ。」

「うん。確かに似てる。しかし日本の宗教音楽は洗練されているな。」

「ロバートの言っている宗教音楽って言うのは雅楽の事か？」

「そうだ。ガガクだ。ガムランは往々にして激しいが、雅楽は最初から最後まで抑制が利いている。」

「それは音数が少ないし、音量が小さいからそう思うだけじゃないかな。」

「そうだろうか。」

「雅楽も踊りのバックミュージックとして使用される事があがるが、バリにおけるガムランのように頻繁に聞く事はできないし、観光化されていると言う話は聞かない。」

「ふむふむ。」

「雅楽は儀式を進行させる為の手段としてより頻繁に演奏される。ガムランにもそういう性質はあるが、より娯楽性が高い。この娯楽性と言うのは観光とは関係無い、土地の者にとってのものだ。決定的に違うのは、雅楽は神に捧げる事を目的とする為に古典的な形態を守り続けているが、ガムランの場合は、中には神に捧げる事のみを目的としたものもあるだろうが、人に聞かせて楽しんでもらう事を前提として演奏するだろう。」

「ふむふむ。」

「だから、新しいスタイルのガムランというものが存在するんだと思う。それは洗練された結果新しいスタイルになるのだから、聞いた印象が我々からみると激しくても、洗練されているのだ。もしくは洗練されている途中なのだ。雅楽が洗練されている、と言うのはそういう意味で正しくない。言い替えれば、音楽性の洗練は終わっている、と言ってもいいんじゃないだろうか。確かに音の響きは綺麗だし、俺も好きだけどね。」

「なる程。」

「日本にバリにおけるガムラン音楽に近いとらえられ方が出来る音楽があるとすれば、民謡か演歌じゃないかな。」

と、こんな様なでたらめな話を1時間以上もしていただろうか。もう真夜中も回っているのでそろそろ失礼しよう、という事になり、丁重に礼を述べ席を立つ。ロバートは、又来てくれ、と握手を求めてくる。

気が付くと3人の若いバリ人がいない。

「あれ、あいつらどこ行ったんだ？」

「ああ、二階でポルノ・ビデオを見てる。」

「はあっ？」

「おーい、ママが迎えにきたぞー。」

どたどたどたどたどどどどどど

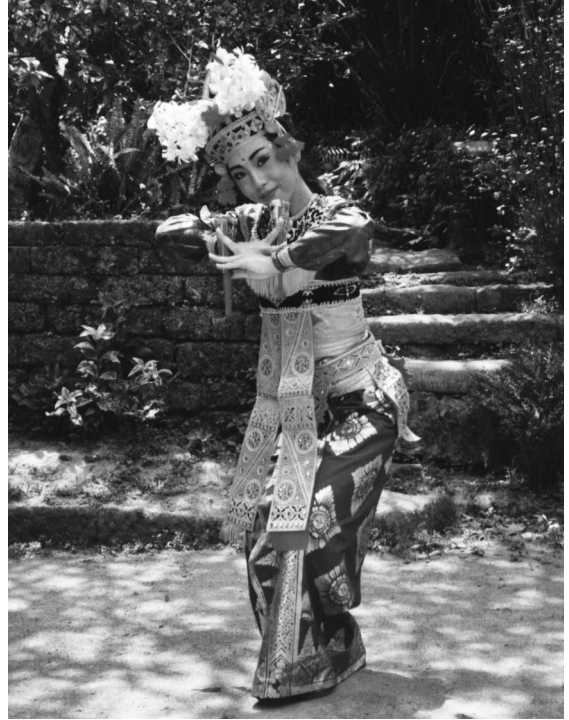
おい、誰かこけたぞ。

私と舞踏

鈴木 ゆかり

ある朝スタジオでの練習を終えて遊んでいたら伊藤さんがやってきました。伊藤さんにとって早朝中の早朝と呼べるこんな時間に「APA?」原稿依頼でした。ウワ〜ッ!こんなマダマダの私でも踊りについて語ってもいいんでしょうか?踊りの神様ゴメンナサイ…。私が踊りを始めたのはつい最近のことです。今年(1995)の4月〜5月に長期の休みがとれたからです。どうせやるならちゃんとやりたい!!と思い込んでしまう山羊座のA型です。先生は以前からあこがれていたスマララティのOKAちゃん先生です。インターナショナルのキャリアを持ちながら「とっても明るいBALIの女の子」でもある彼女に安心しつつ練習に入りました。バリの踊りを始めて、ちょっと神様に感謝した事があります。私自身、日本人の平均よりかなりチビの部類に入り、コンプレックスを持っていたんですが、バリダンスをするにはちょうど良いサイズだそうです。実際先生と並んで鏡の前に立つとほとんど同じです。しかし、腰の高さが違うぞっ!ひざの高さも違うぞっ!私って悲しい程日本人体型だったのね…と認識しながらも、生まれてはじめてチビで良かったと思いました。体のタテ・ヨコが同じと言ってもあんな風に動けるかと言ったら大まちがいです。ダンサーの皆様はあんなにやわらかくしなやかに踊ってらしゃるのに自分でやってみたら「すごいたいへん」の一言でした。キレイなポーズで踊るのなんてかなり遠い未来になりそうでちょっと悲しくなりましたが“まあいいか…いつかキレイに踊れる”と深く考えるのをやめました。2ヶ月近く習うんだから帰国までには覚えたいという気持ちも先生にも伝わったのか“今日から朝一回、夕方一回、毎日2回の練習にしようね”なんてニコニコして言われた時、心の中では青ざめていました。片道15km近い距離の移動だけでもヨロヨロになっていると言うのに…。それから毎日2本以上はリポビタンを飲む生活でした。今回のバリ旅行は大変な事になってしまった…と思いながらPM9:30にベットに入る私…。信じられないこの生活…。実際の私は大のアルコール好きでPM9:30なんてまだ夕方!!

なんて言いながら毎晩深夜まで飲んでいますが…。主人も親も私は早く死ぬだろうとサジを投げる程の不健康ライフ。こんな私ですがいきなりヘルシーライフをつきつけられ、やってみたらそれもまた楽しんで感じて、バリダンスのおかげで健康的な生活もできるようになりました。



実際、足腰は強くなるし背スジは伸びるし体にはすごく良いと思います。そしてヤセます(最初だけかも…)興味がある方はぜひ体験してみてください。そしてもう一つ、練習後のビールが超ENAKでゴザイマス。ビールを飲めない方でも一度は試してほしいです。ついつい飲みすぎて二日酔いになっても大丈夫、レッスンで大汗をかくので二日酔いなんてすぐ治ってしまいます。酔っぱらってドブにはまっても大丈夫、足腰に筋力がついているので大事には到りません。(実話)

話がかなり横道にそれてしまいました。まあそんなこんなで現在またバリで踊りを習っています。今回も覚えが悪く自己嫌悪に陥ったりしています。しかしイヤな顔をせず(たまには怒ります)時には朝ゴハンを用意してくれたり。体調くずしたりすると本気で心配してくれたり、ダンスに限らず心でつきあってくれる先生とバリの人々に心から感謝しています。

最近小さな女の子たちが練習を見に来たりします。彼女たちはすでにプロなのでごく恥ずかしいです。心の中で笑ってるんじゃないかとちょっと心配になります。でも楽しんでいただけるならまあいいか…。何事もリラックスよねー。と心まで広くなれるバリダンス…。リラックスに踊れるようになるにはほど遠いけど、こうして習う事ができる環境とたずさわってくれたすべての人々に TERIMA KASIH BANYAK.



Toko² Sayang



お店紹介



Toko ◇ BEST 店

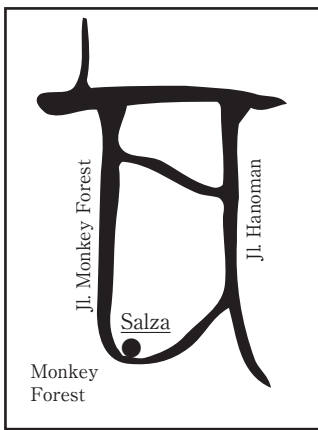
Salza

Jl. モンキーフォレストの、もうすぐそこが森、というところに小じんまりと OPEN した Salza。なんと刺繍のお店なのです。日本で刺繍って古くさいイメージがあるけど、ここのはラテンっぽいのもあれば、エスニック風のもあって、それがシャツやベストにとってもいい具合に縫ってあって、超おしゃれ。

手間賃のまだ安いスラバヤでつくって、KUTA にあるもう一軒とここ UBUD でしか販売していない。まだ品数は少ないし、手づくり一点もの感覚である。これからもどんどん新しいデザインをがんばってつくってもらいたいものです。

とにかく・かわいいので、散歩がてらにでも寄ってみて。

Jl.Monkey Forest UBUD BALI phone:0361-974664



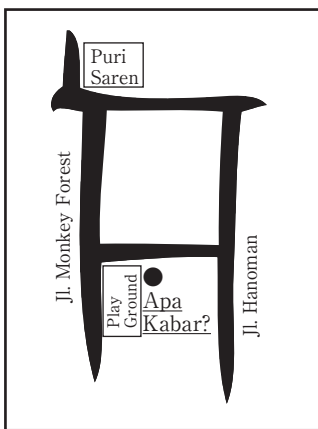
Warung ◇ 味な店

Apa Kabar?

今まで、バリ人のつくるスパゲティに、少々ガッカリすることの多かった UBUD のイタめし事情が、この「Apa Kabar?」の出現によって、大きく改善された。

イタリアン・レストランとはちょっと大声では言えないような、小さな小さなビストロ風。Jl. モンキーフォレストからサッカー場を右に見ながら東に折れてすぐ、右側にある。メニューはスパゲティ中心。これがアルデンテのゆで具合といい、ソースのからめ具合といい、ボリュームといい、レストランというよりはイタリアの家庭の味に近いのではなからうか。…と言うのも、この料理指導をしている人物が正真正銘のイタリアーナなのだ。かなりのボリュームなのだがツルリと平らげてしまえるおいしさ。特にトマトベースのものが本格的。つつい食べすぎてしまわないよう、アテンシヨーネ!!ね!

Jl.Rama Sita UBUD BALI phone: なし



私の常宿

Pondok Manis

TEGAL SALI ACCOMMODATION

近藤 厚子

私はこのバンガローがとても好き。だってホントに清潔。こんな清潔なバンガロー見たことない。そして何たって部屋は広く、収納スペース（もちろん清潔、カビの臭いすらない）も充分で安心して大事な洋服を預けることができる。

バスたぶもあり、入浴を楽しむことができ、お湯の出に関しては文句のつけようがない。さらに2FにStayすると、その景色はすばらしい！視界の広さは抜群！夕陽が沈むのを見ていると、まるでアフリカにでもいるような気分になれる（こともある）。

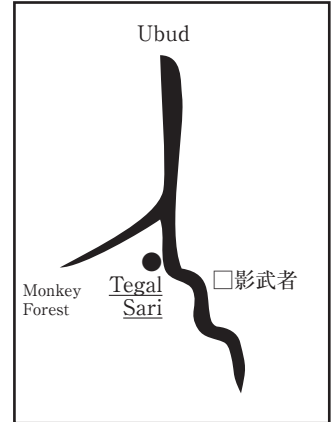
レンタルサービス（自転車、バイク、車）でレンタルもでき、トランスポートもサービスしてくれる。また近くのヌリアニレストランからルームサービスをうけることができ、どうしようもない雨の日に、とても便利。今年から日本語のできるスタッフが加わり、言葉に自信のない人もこれで安心。

そしてさらに一泊の値段がとてもリーズナブル。交渉次第で、このすばらしいバンガローに破格でStayできる可能性もある。言うことなし。欧米人のリピーターが多いのもうなづける。

Address

Jl. Hanoman Padang Tegal Ubud (80571)

Phone:(0361)96318 P.O.Box 183



Pesan & Kesan

旅人一声

小林 佳代

私は今、風通しの良い場所にいる。バリ島では寺も家も店もほとんど壁がなく、いつも涼しい風が吹き抜けている。鳥のさえずり、ティンクリックの音色、ガラム（タバコ）の香りが漂っている。目の前には、段差のあるあざやかな緑のライステラス。その周りをきれいにフチどる濃い緑の草。ところどころにつき出るヤシの木。犬が田のまわりをかけまわる。ここでは雨がたくさん降る。だから米、野菜、フルーツなどが豊富にとれ、家畜や動物達が良く育つ。みんなすてきな笑顔を持っている。ひとりひとりが同じ宗教、同じ文化を守り続ける。きっと心が豊かだからできるのだろう。小さな小さな島から大きなカルチャーショックを受け、今まで自分が生きてきた世界が小さく思える。夕方になると、夕日に映った景色を背に、色とりどりのお供え物を頭に乘せた女達、そしてサロンをつけた男達が祭りへと向かう。私はこんなバリの日々を一生忘れないでしょう。

DARI JEPANG

☆おなじみ「Dr. スランプ」や「聖闘士星矢」、「ドラゴンボール Z」等の脚本を書かれた小山高生さんから、こんな楽しい News をいただきました。必見！！

ワヤンさん、いらっしゃい

小山高生

いつも楽しく拝読しております。
News を一つご報告させて戴きます。
私の定宿でもある御馴染みの Sehati Guest House の WAYAN KARDIKA 君が、私（小山高生）が脚本を担当する NHK 教育テレビの学校放送・小学 3&4 年生向けの道徳ドラマ「さわやか 3 組」にバリ人の役で出演します。よろしかったら日本在住の WAYAN ファンのみなさんに、貴誌を通じてお知らせいただけましたら幸いです。
ロケーションを 12 月 8 日～12 日まで栃木市で行い、スタジオ収録を 12 月 16 日に NHK の 112 スタジオで行います。その間、彼にはりハースルが待ち受けております。

■ 放送予定 ■

「さわやか 3 組」

第 16 回「ワヤンさん、いらっしゃい」

放送日時： 平成 8 年

1 月 10 日（水）午前 9:45～10:00

再放送日時：

1 月 11 日（木）午前 10:00～10:15

1 月 17 日（水）午前 9:45～10:00

1 月 18 日（木）午前 10:00～10:15

これは「わが国の文化や伝統に関心を持ち、国を大切にする」という道徳の指導要綱の徳目を、各小学校のクラスの道徳の時間で指導する際の教材となるものです。

まず授業の始めにドラマを視聴し、その後で先生と児童がそれをもとにディスカッションする為の資料になるわけです。

話の内容は…、「単身赴任でバリのホテルに料理指導に行っていたレギュラーの女の子・三和の父親が、半年ぶりに日本へ帰る所から始まります。その時、父親がバリで知り合ったワヤン青年を栃木の自宅に連れて帰るのです。そして、小学 4 年生の一人娘・三和とワヤンとが互いにカルチャーショックを受けつつも、交流を深めるというもの」です。

彼は重要なゲストキャラクターとして台詞もたくさんあり、日本の子供とガムランを演奏するシーンもあります。また、父親が 8 ミリビデオで撮ってきたバリの記録（実は今回私が撮影したものを使う予定です）を三和たちのクラスで見せるシーンも登場します。その際、Sehati のスタッフ、ワヤン君の妻子も登場する予定です。ラストでは、降ってきた雪に大喜びのワヤンさんを見ながら、三和が「いつか私もバリ島に行ってみるわ!! きっと行く!」と決意します。もちろん、「私がお案内します」というワヤンさんの台詞が続きます。

15 分番組ということで、また道徳の時間ということもあって制約が多く、決して十分ではありませんが、それでも日本人とバリ人の理解と友好を願って書かせて戴いたものです。

日本在住の読者のみなさん、放送時間がとんでもない時間ですが、よろしかったら録画でもして戴いて御覧下さい。ご意見、ご感想などお聞かせ戴いたら幸いです。

1995 年 11 月 27 日

その他のニュース

■ガンプ定期公演実現

パンジ王子の恋と戦いの舞踊劇。ガムランは長さ1mもある竹笛数本を中心に伴奏される古典芸能“ガンプ”。16世紀頃にジャワのマジャパイト王国時代に書かれたもので、バリの舞踊のルーツとなっている。現在はバトゥアンと他三ヶ所にのみ残っているだけで、観る機会の少ないものである。バリの人に人気がないのか、残念ながら衰退状態であるという。バリ舞踊の巨匠といわれる、バトゥアンのジマツト氏のグループが、財団法人をつくり保存に努め、毎月一日と十五日に定期公演されている。チョンドン役のジマツト氏の娘の力強い演技は素晴らしいものである。そしてジマツト氏演じるパンジが観られることがあれば、きっと感動間違いなしです。公演日は「居酒屋・影武者」に無料トランスポートが迎えに来ます。「情報センターAPA?」「居酒屋・影武者」で予約を受け付けています。古典芸能の優美さを堪能しようではありませんか。



■バリ文字の普及はまず標示板から!!

UBUDのジャランの標示が、板切れから美しいグリーンのプレートに変わりました。どことなくヨーロッパの薫り漂う標示板の趣です。うれしいことにローマ字の下にバリ文字でも表記されています。バリ人がいかにバリ語をたいせつにしているかという考え方のあらわれではないでしょうか。プラ（寺院）にもバリ文字で寺院名が書かれるようになり、バリ文化の保存に心がけていることが感じられます。



■ワルンに日本語のメニュー登場!!

Vol.10で紹介した元気なおぼはんのいるワルン・ブラバトゥに、なんと日本語で書かれたメニューが登場しました。メニューの工夫一つでこんなに料理が美味しそうに見えるとは感心しました。料理の説明がわかりやすく、そして料理の写真が貼ってあるのも嬉しいです。日本人の女性二人組が協力したようで、親切にも注文の時のインドネシア語のミニ・会話集が載っていて、インドネシア語の苦手な人にも安心というわけです。これでクンタン・ゴレン（フライド・ポテト）とナシ・プティ（白飯）という注文で失敗することはなくなりました。

■カードでお金が出せる！ってほんと？

◇◇◇◇ UBUD の銀行事情◇◇◇◇

つい最近まで、通帳を作成した銀行の同じ窓口でしか出金できなかつたり、それ停電だ、コンピューターの故障だなど、どうしても窓口で待たされるが多かった、B・C・A（バンク・セントラル・アジア）に、なんと IBM 社の ATM が導入され、UBUD 支店にも設置されました。取り扱っているのは、B・C・A の預金者のキャッシングのみ。残念ながら VISA や MASTER のクレジットのキャッシングはできません。でも預金者は 24 時間、カードでお金を引き出せるわですから、これはもう画期的なことではありませんか。

B・C・A に預金のない方には関係のないニュースですが、ゴールドカードとシルバーカードがあり、作成料 Rp5000- で、ゴールドカードは引出額が一日のうち Rp200 万までで月使用料 Rp2000-、シルバーカードは引出額 Rp100 万までで月使用料 Rp1000- となっています。ついに UBUD もボタン時代の幕開けでしょうか？！



▲しかし…、停電したら一発でダメになりそー。

■N・D・Aのソフトクリームが消えた??

読者からの情報によると、Vol.6 の“その他のニュース”で紹介した、スーパーマーケット N・D・A のソフトクリーム・コーナーが、日本食物業コーナーに変わっていたそうです。これは一階にマクドナルドが outlet し、追い出されたのではないかという噂です。そして、追い出されてしまったフロスティ・ボーイのソフト・クリームは、競合店のスーパーマーケット・ヘローの入口で開業しているそうです。マクドナルドもエナですがフロスティ・ボーイのソフトクリームもエナですので、一度お試しください。

■東京にバリの風…、Monsoon CAFE

'95 年、夏頃のオープンだったので、もうニュースってわけではないのですが、東京／代官山の旧山手通り沿いに「Monsoon CAFE」というエスニックカフェが出来ました。通り沿いにバリのオダランでよく見かける布の旗（なんつったっけ？）が並んでいるので、すぐに発見できると思うのですが、ここがね、いいんですわ。東京に居て、ちょっとバリが恋しくなった時行ってみてください。3 階建ての建物全部がこのお店で、ゆったりとした作りが、バリのカフェを思い出させます。一階は吹き抜け…、二階は半分くらいがオープンテラス席…、三階は真ん中に池なんかあってその上の天井が抜けてて、月がポッカー見えたりして。いたるところに大きなバリ絵画が飾られてて、インテリアのあちこちに「バリで仕入れたらしきモノ」を発見できます。お料理は、無国籍エスニックでナカナカいけます。それに、東京にはお値段も手頃。ピントビールもおいてありました。確か朝の 5 時くらいまで営業していて、なんと駐車場まである。問題は、とっても流行っているせいか、金曜や土曜の夜は、当日リザーブじゃ入らないくらい混んでます。ウィークデーの深夜が狙い目なのかもしれませんね。

以上、東京特派員の報告でした。

おまたせはいた!

'96 Hari raya (祭日) 情報!!

- 3月21日(木)... ニュピ
- 5月11日(土)... ガラスワテの日
- 7月24日(水)... ガルニガン
- 8月3日(土)... 7ニンガン
- 12月7日(土)... ガラスワテの日

今からバカンスの予定をたてちゃおう!

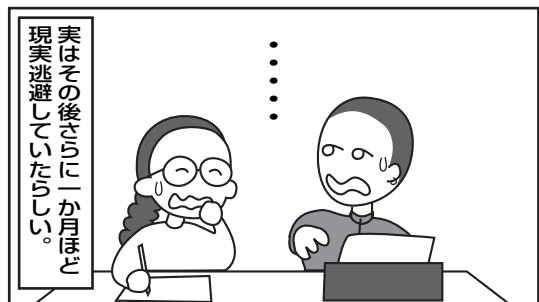
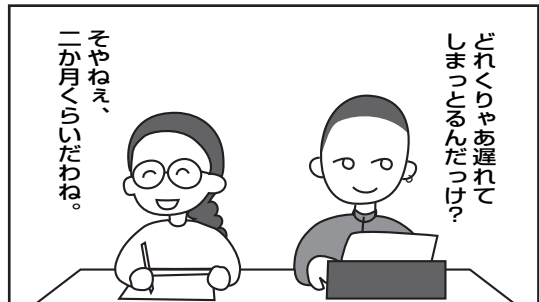
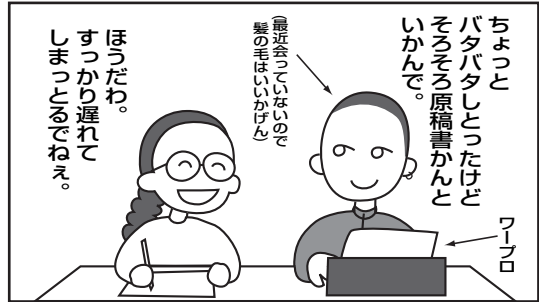
2月のオダラン情報

- 5日... Pr. Hyang Thiba - Batuan
- 14日... Pr. Natih, Br. Kalah - Batubulan
Pr. Puseh. Pr. Desa -
Silakarang Singapadu
- 20日... Pr. Dalem. Desa Celuk - Sukawati
Pr. Dalem Puri - Batuan
Pr. Dalem Kediri - Silakarang -
Singapadu,
Pr. Dalem - Desa Sukawati
Pr. Dalem Singakerta - Ubud
Pr. Dalem Lembeng - Ketewel -
Sukawati
Pr. Paibon Pasek Tangkas -
Peliatan, Ubud
Pr. Puseh Ngukuhin Keramas -
Gianyar
Pr. Karang Buncing - Blahbatuh
Gianyar.

ちほみに 踊りとガムランを習いはじめるの
によい日は、今月は(2月)

- 4. 5. 6. 8. 9. 11. 20. 21. 23. 24.
25. 27 の各日です。

うぶな人々 その11 ほりり



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、3,000円。おろかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

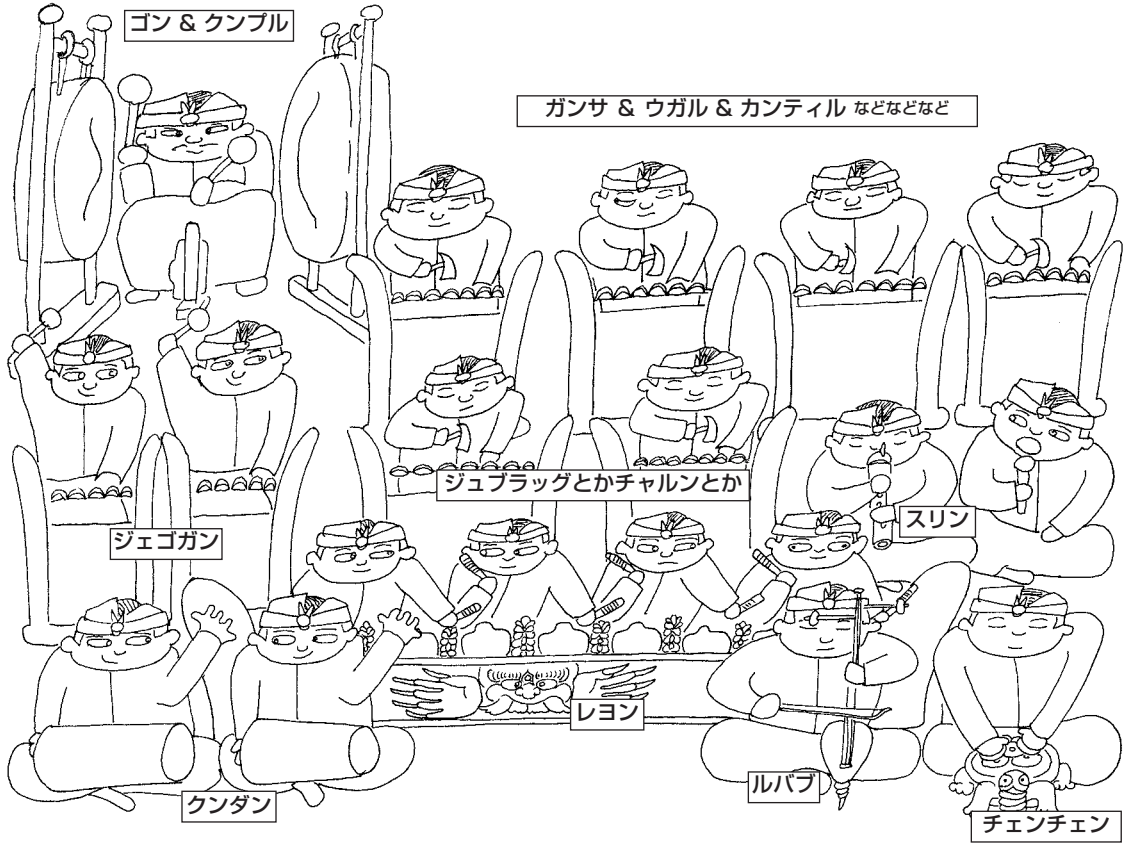


楽器の名前



☆一応こんな感じですが、編成や種類によって、イロイロ呼び方が変わっちゃたりしますので、あしからず。

Illust:M. Ohhara



Enak shower

Pengumuman

■ Vol.9の“洗剤について”に読者から、廃油で作る石けんの作り方のお便りをいただきました。どうもご協力ありがとうございます。UBUDではレストランの廃油は従業員が家に持ち帰り、かなり古くなるまで使っているようで、集めることがむづかしいそうです。しかしなんとか集め実験する予定ですので、次には実験の報告ができると思います、ご期待ください。

■ Enak shower TIMES

UBUDで知り合った、旅好きK子さん（年齢不詳）と話し込んでいるうちに、K子さんは友人と二人でミニコミ新聞を発行していることを知った。B5サイズの「Enak shower TIMES」。インドネシア、バリ好きが一目でわかるネーミングである。旅先での出来事、幼い頃の思い出、なんでもかまわないので投稿してくださいと呼び掛けています。締切は偶数月の20日に必着とのことです。そして定期講読も募集中ですので、ご希望の方は講読したい日数×80円切手を同封の上、下記連絡先までお送りくださいとのことでした。

連絡先：

〒167 東京都杉並区西荻北5ノ15ノ7

Enak shower TIMES

Enak shower TIMES



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / Yumi S. / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーアートワーク：小島基典

ロゴデザイン：Hiroko S.

極楽通信「UBUD」Vol. 11

1995年12月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha
Jl. Suweta No.16.Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1995 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16, Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803